二十歳のつどい祝辞（令和６年１月７日）

20 歳という人生の節目を迎え、故郷に集われた皆さんを心から祝福します。また、これまで深い愛情をもってお子様を立派に育てあげられたご家族の皆さまにも心からお祝い申し上げます。皆さんの表情は、多少の気負いも感じられ初々しいさが残るなか、 とても晴れやかで眩しく、お招きいただいた私たちも明るい未来を感じられて大変うれしく思います。もちろん、久々の故郷での旧友との再会に心躍ってもいらっしゃると思いますが、せっかくの節目でありますので、皆さんが過ごした２０年の軌跡を、これまで皆さんを支えてくれたご両親や大勢の方々との出会いに感謝しつつ、思い返して噛みしめていただければ幸いです。

今年、厚真町では３４名の方が二十歳を迎えられました。皆さんは平成１５年から平成１６年生まれで、当時の事を振り返りますと、イラク戦争が勃発し、世界各国でテロが多発しました。日本も初めて、自衛隊が戦時下にあるイラクへ派遣されました。また、中国や台湾、シンガポールで新型肺炎ＳＡＲＳが流行しました。あれから 20 年たった今は、更に深刻さを増しています。なぜなら国際連合安全保障常任理事国であるロシアが、隣国ウクライナに侵攻してすでに２年が経過しようとしています。中東ではイスラエルがパレスチナに侵攻しています。いずれも出口が見えない暴力の連鎖です。50 年以上前に歌われたジョンレノンの Imagine は「想像してご覧、天国もない、地獄もない、僕たちの上には空があるだけ。ただ今日を生きている。想像してご覧、国も宗教もない。ただ平和に暮らしている。想像してご覧、欲張ったり飢えたりする必要もない。全ての人たちが、世界を分かち合う。皆が理解してくれたら、世界は一つになるんだ。」みんなが願う平和な世界を今一度想像してみてください。

さて、今年は平成３０年９月６日発生した北海道胆振東部地震から６度目の春を迎えます。皆さんが中学校３年生の秋に発生した北海道胆振東部地震から既に５年と４か月が経過します。厚真町は多くの尊い命を失いましたが、それでも国や北海道のご尽力、全国から寄せられた物心両面のご支援により、堆積土砂の撤去、急斜地崩壊対策などの復旧工事も急ピッチで進みました。私たちは、「決して立ち止まることなく、先人や犠牲となられた方々の夢や希望を引き継ぐ決意」をこれまで繰り返し発信してまいりました。１０００億円を超える公費の投入、３万人を超える関係職員のご尽力、５千人を超えるボランティアのご協力を決して忘れてはなりません。これからも、被災者に寄り添いながら傷ついた心や被災森林再生に全力を尽くしてまいりますが、町民の皆さんが心から笑顔を取り戻し、美しい厚真町の自然が回復するまで、老若男女の別なく厚真町民が一丸となって、乗り越えていかなければならない長く険しい道のりが今後も続きます。特に、本日の二十歳の集いに参加さ

れた皆さんには、立場や形はそれぞれに違えても、厚真町の復興、新しい未来の創造に若さあふれる知恵とエネルギーを是非、お貸しいただきたいと願っています。

皆さんは、これまで新型コロナウイルスの世界的流行により、進学先での講義や人的交流などが大きな制約を受けて辛い想いをされてきたと思います。思いもよらぬ困難が行く手を阻もうとも、皆さんには希望を失わず努力を続けていただきたいと願っています。自分の未来を切り拓いていくために必要な大切な土台作りの時期です。基礎がしっかりしていれば、その上に立派な建物が建ちます。映画監督のジョージ・ルーカスは「希望は想像力の中にある」と語りました、様々の方が引用していますが、私もその通りだと思います。もう一つ申し添えれば、「転ばないように見守ってくださったご両親の元から離れ、社会人として独り立ちしていくこれからは、是非、転んだところから何度でも立ち上がり、学びと人生の糧としていく気概が大切です」そう信じている私からの皆さんへのエールとして贈らせていただきます。厚真町も復興のステージへ前進するために、循環型社会の形成、自然災害への備え、更なる挑戦をキーワードに「カーボンニュートラル」「基幹産業である一次産業分野への Society5.0 いわゆる新技術取り込み」「社会課題解決に向けたデジタル化」、グリーン×グリーン×デジタル政策を柱として５０年後を展望した新しいまちづくりを構想しています。是非皆さんのご理解とご協力をお願いします。

結びに、不屈の魂のように先人から受け継いだバトンが次世代の皆様方に受け継がれることを願いながら、前途洋々たる皆様とご家族の皆様に幸多かれとご祈念申し上げ、祝辞といたします。本日は誠におめでとうございます。

令和６年１月７日

厚真町長 宮坂 尚市朗